

資料

米国のポピュラー音楽ミュージアムと
アーカイブに関する事例調査

杉 本 舞

A report on the operations of archival systems and a museum on
popular music in the United States of America

Mai SUGIMOTO

Abstract

This paper is a report on the Rock & Roll Hall of Fame and Museum in Cleveland, Ohio, and also provides an account of interviews conducted with archivists from the Rock & Roll Hall of Fame Library and Archives and from the Archives and Special Collection Units at the University of Minnesota, Twin Cities. The interviews concern the technical issues involved in organizing archives of audiovisual materials and also related copyright issues.

Keywords: museum, archive, library, digitization, popular music, rock music, audiovisual materials, copyright, the United States of America

抄 録

本稿は、米国におけるポピュラー音楽ミュージアムとアーカイブの現状を把握するために行った、見学と聞き取りの調査記録である。映像資料のアーカイブ構築に関する技術的問題、資料の公開に際しての著作権問題について聞き取りを行った。

キーワード：博物館、アーカイブ、図書館、デジタル化、ポピュラー音楽、ロック、映像資料、著作権、アメリカ合衆国

1. はじめに

本稿は、音楽アーカイブやミュージアムに関する調査記録の一つである。昨今各種アーカイブへの需要は高まっており、とりわけ音楽や芸能をはじめとした無形文化遺産のアーカイブに関する検討が各地で進められている。関西大学でも2013年4月より関西大学ポピュラー音楽アーカイブ・ミュージアムプロジェクトとして、ポピュラー音楽に関する映像、音源、文書を含む文化資産の収集と保存を開始し、将来的な公開へ向けて研究を進めている。ポピュラー音楽のアーカイブについては国内に先行事例がなく、プロジェクトを進めるにあたっては、海外の事例を調査し、音楽アーカイブ特有の課題について整理しておく必要がある。また図書館や博物館と連携した形でのアーカイブについて、その運営上の課題を明らかにしておくことが望ましい。そこで本調査では、ポピュラー音楽のアーカイブとミュージアムについて先進的にプロジェクトを進めている「ロックンロール・ホール・オブ・フェイム博物館 (Rock & Roll Hall of Fame and Museum)」および付属の「図書館とアーカイブ (Library and Archives)」を訪問して見学と聞き取りを行った。また、学術機関におけるアーカイブ運営に関するアメリカ合衆国での現状を調べるため、ミネソタ大学ツインシティー校 (University of Minnesota, Twin Cities) を訪問して聞き取りを行った。

訪問および聞き取りは筆者一人で行い、許可を得て録音機器を使用し、記録を残した。使用言語は英語であった。調査内容にあり得べき誤謬は、すべて筆者に帰するものである。

なお、この調査は関西大学の平成26年度研究拠点形成支援経費を得て行った。

2. Rock & Roll Hall of Fame and Museum 訪問記録

調査の状況

ロックンロール・ホール・オブ・フェイム博物館 (ロックの殿堂) は、アメリカ合衆国オハイオ州クリーブランドの中心部近く、エリー湖畔に位置する (図1)。この博物館は、1983年4月に創設されたロックの殿堂財団 (The Rock and Roll Hall of Fame Foundation) を主体として運営されており、1985年にクリーブランドへの誘致が始まったのち、1995年に開館した。2013年の1年間で441,290人の来館者を誇り、2013年において

は、収入の50パーセントを入場料とミュージアムストア収入から得ている¹⁾。筆者は2014年8月27日に博物館を訪問し、通常の来館者と同様に内部を見学した。とくに案内者は依頼せず、ここでは聞き取りも行っていない。これは、博物館の訪問が、翌日予定されていたアーカイブでの聞き取りの予備調査という位置づけでもあったためである。見学時間は約3時間半であった。内部は写真撮影可能であった（ただしフラッシュ撮影および動画撮影は禁止されていた）。博物館は地下1階から4階までで構成されており、順路は地下1階、2階、3階、4階、1階の順で設定されていた。1階には受付とミュージアムストアがあるだけで、展示はそれ以外の階で行われていた。



図1 ロックンロール・ホール・オブ・フェイム博物館外観

地下1階の展示

地下1階は「ロックの起源と発展 (The Origin and Evolution of Rock and Roll)」と題し、順路に沿ってほぼ時系列に展示がなされている。リズム&ブルース、カントリー、フォーク、ブルグラス、ゴスペルなど、ロックが出現する前のジャンルやアーティストの紹介をはじめ、ロックの発展を様々な切り口から追えるように工夫が凝らされている。以

1) "2013-2014 Report to the Community", http://www.rockhall.com/media/assets/files/RockHallAnnual_2013-2014_062614.pdf (最終閲覧日2015年6月30日)

下、展示の順番に沿うのではなく、展示手法の種類に着目して内容を紹介する。

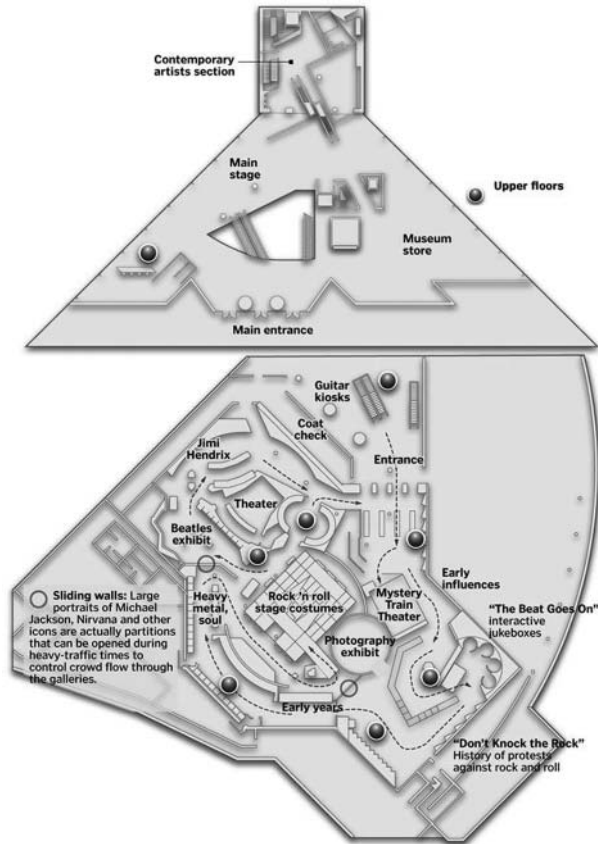


図2 ロックンロール・ホール・オブ・フェイム博物館1階および地下1階のフロアプラン²⁾

展示の特徴としてまず挙げられるのは、映像資料が豊富に用いられている点である。他の展示とは隔てられたシアター形式のブースが複数設置され、来館者は席に座って映像と音声を観賞することができる。例えば、地下一階での最初の展示は“Mystery Train”と題された12分の短いフィルムであり、入れ替え制で20人程度ずつ観賞するシステムになっている。1950年代のカントリー、ゴスペル、ジャズなどを含めた様々な音楽が米国各地で

2) 出典：“A look inside the redesign of the Rock and Roll Hall of Fame and Museum: Interactive graphic”, cleveland.com, 2012.3.12, (http://www.cleveland.com/popmusic/index.ssf/2012/03/a_look_inside_the_redesign_of.html) (2015年7月10日閲覧)

発展し、それがロックンロールのルーツとなったことを、ボブ・ウィルス（Bob Wills）、ルイ・アームストロング（Louis Armstrong）、チャック・ベリー（Chuck Berry）、エルヴィス・プレスリー（Elvis Presley）といった著名なアーティストらの映像と、当時の生活に関する映像を交えながら紹介する。地下一階の順路後半にはシアター形式のブースがもう一か所設置されているが、こちらは40席ほどの客席が設定されて、出入りは自由であった。筆者の見学時には、ディック・クラーク（Dick Clark）のテレビ番組“American Bandstyle”に出演した様々なアーティストの映像集が放映されていた。アーティスト一人につき20～30秒ずつ切り取った映像を繋ぎ合せたもので、すべて観賞すると30分ほどの長さとなる。時代は1952年から1989年までと37年の幅があり、著名なアーティストの若い頃の映像も見ることができた。

博物館全体として、展示の多くはパネルによる説明と、当時の衣装、楽器、パンフレットといった物の展示であった。たとえば“Cities and Sounds”というコーナーでは、米国内の各都市（メンフィス、デトロイト、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ニューヨーク、シアトル）、そして英国都市（リヴァプール、ロンドン）など海外という地域別で、音楽シーンに関する展示がなされていた。展示ケースの中に、関係するアーティストにまつわる衣装や楽譜、レコードなどが置かれ、その中央に液晶モニターが設置され、ライブ映像と音楽（スピーカーが設置されている）が流れているという形式であった。ヘヴィメタル、ソウル、ヒップホップといった分野別展示、ビートルズ（The Beatles）、ローリングストーンズ（The Rolling Stones）、ジミ・ヘンドリックス（Jimi Hendrix）といったアーティスト別展示も同様の形式で行われていた。その他に、殿堂入りしたアーティストたちの衣装や楽器などの展示も、地下1階フロアの最後にまとめて行われていた。

スピーカーではなくヘッドフォンで音楽を聞く形式の展示もみられた。たとえば“The Early Influences”というコーナーでは、ロックンロール出現以前のアーティスト30名ほどについて写真と説明文によるパネル展示があり、その前に十数個のヘッドフォンが設置され、アーティストらによる演奏の音源を聞くことができるようになっていた。

フロアの各所にキオスク端末（Kiosk）が設けられ、そこで様々な音源やアーカイブ所蔵の映像の一部などを見ることができるといことも、この博物館の大きな特徴であった。キオスクは、カラー液晶画面に触れることで操作することができる1メートル弱ほどの高さの端末で、1台につきヘッドフォンが2個備え付けられている。各所のキオスク（1か所につき5台ずつ設置されている）にはそれぞれテーマが設定されている。例えば、“the beat goes on …: how artists are influenced by the music that came before them”とい

うキオスクでは、あるアーティストが過去のどのようなアーティストの影響を受けたのか、ということについてタッチパネルを操作しながら学ぶことができる。アーティストはジャンル別に検索することもでき、各アーティストの画面では、説明文とともに静止画やライブ映像が表示され、ヘッドフォンでは音源を聞くことができる。画面には、そのアーティストが影響を受けた人物・与えた人物の表示もあり、画面の操作でそういった別のアーティストの画面へと遷移することもできる。アーティストの説明文には引用情報が明記されており、このキオスクで表示される情報がポピュラー音楽史研究に基づいていることがわかる。

“on the air: rock and roll radio”というキオスクは、ラジオ放送の人気とロックの興隆とを関連付けたもので、米国のエリア・都市、年代ごとにラジオパーソナリティが検索できるというものであった。ヘッドフォンを用いると、エアチェック音源が流れるのを聞くこともできる。クリーブランドのDJであり、ロック草創期の鍵となる人物であったアラン・フリード (Alan Freed) なども検索することができる。こういったキオスクは2階にも設置されており、例えば“one hit wonders”と称するキオスクでは、1曲しかヒットしなかったが非常によく記憶されている歌について、年代あるいはアルファベットで検索し、音源を部分的に聞くことができた。“the songs that shaped rock & roll”というキオスクでは、1920年代から2000年代にわたる歌を、これも年代あるいはアルファベット順に検索できるようになっていた。

キオスクでの検索と音源観賞は、来館者が自らの関心に従って、スピーカーなどで音楽を流すよりも、より多様な音源に触れることができる仕組みになっている。また、説明文はもとより、キオスクのテーマ設定そのものについても、専門研究に裏打ちされた解釈に基づいていると考えられる。いずれにせよキオスクは、博物館を単に音楽にまつわる事物の展示だけでなく、無形文化財を展示する場所とする仕組みとして、有効に組み込まれているものであった。

2階の展示

建物の吹き抜け構造上、2階の展示フロアは地下1階に比べてかなりコンパクトである。2階は“The Architect of Rock and Roll”と称し、アーティストではなく、「技術イノベーター、マス・コミュニケーター、そして愛聴者たち (Technical innovators, mass communicators and sympathetic ears)」、すなわち音楽レコーディングの技術やラジオに焦点を当てた展示がなされている。具体的には、テネシー州メンフィスでサン・スタジオとサン・レコードを創設したサム・フィリップス (Sam Phillips)、クリーブランドのDJであったアラン・

フリード（Alan Freed）、ギタリストで様々な録音技術の導入で知られるレス・ポール（Les Paul）が取り上げられていた。例えば、Ampex 350テープレコーダーやRCA 70-Dラジオコンソールを含むフィリップスのサン・スタジオの復元展示や、フリードの映像とその生涯に関する年表、レス・ポールの再現スタジオなどである。その他には、“Rock and Roll and the Evolution of Audio Technology”として、蓄音機からiPodに至る録音機器が年代順に展示されていた。アラン・フリードがクリーブランドゆかりの人物であるという背景もあってか、アーティストそのものだけでなく、その周辺で音楽文化を支える、録音や放送技術に対する目配りがなされているのが2階の展示の特徴である。

3階と4階の展示

3階にはシアターが2か所設けられている。片方は“The Foster Theater”と名付けられた100席ほどのシアターで、博物館を運営する財団が行ったイベントのライブ映像が流されている。筆者が訪問したときは、“The 25th anniversary Rock and Roll Hall of Fame Concerts”の映像が流されていた。もう一方のシアターでは、殿堂入りしたアーティストの紹介がなされており、写真やパネルでの展示と、映像の両方をみることができた。こういった映像は、アーカイブに所蔵されているものであると考えられる。

4階は特別展スペースである。筆者の訪問時には、“Common Ground: The Music Festival Experience”として、音楽フェスティバルに関する展示が行われていた。音楽フェスティバルにまつわる展示物とパネルでの説明があり、階段を上った先にある最上階の空間には、音楽フェスティバルを追体験できるような映像と音声、光による装置が設営されていた。4階にはアラン・フリードを記念して作られたラジオスタジオもあり、実際にここでラジオ番組も制作されている様子であった。

まとめ

この博物館では、ロックンロールの歴史的な文脈や技術的背景を意識しながら、非常に多様な収蔵品が展示されていた。また、そういった収蔵品は豊富な映像資料や音源資料と組み合わせられ、来館者の理解や気づきを促す構造になっていた。とりわけ、キオスク端末などを通じ、音楽資産に来館者が主体的に触れ合える仕掛けをつくっているのがこの博物館の特徴であり、そのいずれもが層の厚い音楽史・音楽文化研究に裏打ちされたものであった。逆に言えば、そういった音源や映像にやや頼らざるを得ないというのが、音楽に関わる博物館の問題点であるとも考えられよう。なお、こういった展示には映像使用料の支払いが必

要であり、豊富な資金力によって支えられていることが、後の聞き取り調査で明らかになった。

3. Rock & Roll Hall of Fame Libraries and Archives 調査記録

「ロックの殿堂」付属の「図書館とアーカイブ (Library and Archives)」は、博物館から約2マイル離れたCayahoga Trinity College内にあるThe Tommy LiPuma Center for Creative Artsの建物の一部を用いて設置され、7名の専属職員によって運営されている。この建物は2009年に完成したもので、Library and Archivesの公開が始まったのは2012年である。開館以来2014年までに来館者は6,700人を超え、400タイトルを超えるアーカイブコレクションと、13,000点の図書を収蔵している³⁾。筆者は2014年8月28日に現地を訪問し、まず所長のAndy Leach氏に館内を案内してもらった後、所長およびスタッフに対し、会議室で聞き取りを行った。対応者はAndy Leach氏 (Director)、Jennie Thomas氏 (Head Archivist)、Dianna Ford氏 (Audiovisual Archivist)、Amanda Raab氏 (Catalog and Metadata Librarian)であった。



図3 ロックンロール・ホール・オブ・フェイム図書館・アーカイブ外観

3) "2013-2014 Report to the Community", http://www.rockhall.com/media/assets/files/RockHallAnnual_2013-2014_062614.pdf (最終閲覧日2015年6月30日)

施設の概要について

「図書館とアーカイブ」の入っている建物では、1階に図書室、閲覧室と所長らのオフィス、2階・3階・4階に資料保管庫（archive storage room）とアーキビストらのオフィス、作業室（image digitization room, audiovisual digitization room）、サーバー室、会議室などが設けられている。建物が2009年に完成してから3年間、資料の搬入と整理、カタログの作成などを行った後、2012年に公開に至ったが、作業は2014年現在も継続中である。

なお、運営資金は博物館を運営する財団から出ている。その他には、個人や機関からのファンドレイジング、政府からの資金などで予算を回しているとのことであった。

図書室と閲覧室

1階に設けられた図書室・閲覧室では、一般からの訪問者を受け付けている。図書室には、音楽関係の図書や雑誌、CD、DVDが配架されている。図書や雑誌は表紙のみスキャンされ、インターネット上で公開されるカタログに掲載されている。閲覧室では、図書や雑誌だけでなく、オーディオテープやビデオテープ、DVDといった資料も閲覧できる。これらは閲覧者が自ら機器を操作して再生するのではなく、スタッフがスタッフ用デスクに設置した機材で再生して、その映像と音声閲覧者用のモニターとヘッドフォンに送られるという仕組みになっていた。他には、アーカイブにおさめられた映像資料を閲覧することができる。インターネット上のカタログに載っている映像資料（パフォーマンス、インタビューオンステージ、インダクションセレモニーなど）がその対象であり、これらはスタッフが資料をデジタル化して利用可能にしたものである。なお、カタログはインターネットを通じて世界中で閲覧できるが、映像そのものは閲覧室内のコンピュータでないと見ることができない。これは著作権の問題があるためである。

資料保管庫（archive storage rooms）

資料保管庫は2階と3階に設置され、IDカードによるセキュリティ管理がなされている。室内には専用の空調が入っており、集密書架に資料が格納されている。紙資料はジャーナリストやアーティストの家族などといった個人から寄付された書類などが中心で、箱に整理されている。サイズの大きいものは、大きな箱や引き出しに保管されている。紙資料の他には、VHS、U-matic、ベータカム、2インチ、1インチのオープンリールテープなどが保管されている。これらは、1990年代の半ばに博物館にやってきたものであるという。デジタル化の済んだ映像資料は、バーコードが貼られて管理されている。

映像作業室 (audiovisual digitization room)

映像作業室は、映像資料の小規模なデジタル化を行ったり、博物館の要求に応じて映像クリップの編集などを行ったりする部屋である。専属の映像アーキビストが作業を担当している。作業室には様々な機器がおさめられており、DA コンバータとしてNYC Mytek Stereo192-DSD DACがあり、他にレコード用ターンテーブル、CD再生機、DAT再生機、レーザーディスク再生機、U-matic再生機、HD再生機などが並んでいた。ベータカム、ベータカムSP、ベータカムSX、デジタルベータカム、MPEG IMX テープの再生が可能であるSony社製 J-30SDIys、Blackmagic Design Multibridge Proなども確認できた。オーディオ編集用ソフトとしては、フリーソフトのAudacity⁴⁾を使用しているということであった。ビデオ編集用ソフトにはApple社のFinal Cut Proを使用していた。アーキビストのDianna Ford氏によれば、米国におけるプロフェッショナル用ビデオ編集ソフトの主流は、2014年現在の時点で、Final Cut Pro、アドビプレミア、AVIDの三種類とのことであった。

サーバー室

アーカイブでは、デジタル資料をハードドライブとテープユニットで保管している。サーバー室には、図書室用のネットワークを担う機器とともに、デジタル化した資料データを格納したこのテープユニットが設置されている。アーカイブでは、資料に冗長性を持たせ、デジタル化した資料のコピーは3か所で保管されている。1か所目はこのアーカイブ、2か所目はミュージアム、3か所目はペンシルバニア州の山中にある保管所である。これは米国議会図書館も利用している巨大な「洞窟」のような場所で、テープそのものが保管されているとのことである。

テープはIBM製で、一本当たり1.5テラバイトの容量である。2011年の東日本大震災以前はSony製を使用していたが、震災後は手に入れにくくなったため、IBM製に替えたとのことであった。テープにはそれぞれバーコードが貼りつけてあり、テープラックに格納されたテープは、リクエストがあればレーザーバーコードスキャナで読み取られ、自動で取り出される。ユニット内にテープは約120本入っているということであった。最近では数テラバイトに及ぶ映像資料が増えつつあり、このままではテープユニットをただ拡張してい

4) Audacityの概要は以下のウェブページで確認できる。<http://audacity.sourceforge.net/> (最終閲覧日2015年6月30日)

くほかないため、今後どこかの段階でクラウドストレージを利用することを考えているとのことであった。

アーカイブ資料のデジタル化について

このアーカイブでデジタル化の対象となっているのは、音源資料、映像資料のほか、選ばれた文書（論文、写真、契約書類、手紙、非常に貴重な雑誌など）である。なかでも映像資料の分量が多い。例えば、Rock and Roll Hall of Fame Foundation Record（殿堂入りセレモニーや、印刷されたプログラム、デジタル映像など）、イベントライブ“evening with”シリーズ（インタビューや歌など）がそれにあたる。1990年代の資料も多く、映像クリップ、展示用映像などもある。こういった音源資料や映像資料のデジタル化は、主に外部に依頼してきた。これまでに60,000ドルのコストがかかったということであった。映像作業室には自前で装置を購入してあるため、映像アーキビストがその装置を用いてデジタル化を行ったりカタログ作りをしたりすることもある。資料のカタログ作りには時間がかかるため、資料のデジタル化を行った後に時間をかけて行っているとのことであった。

デジタル化した映像資料データについて

アーカイブではひとつの映像資料につき、保存用のデータと、アクセス用のデータを別に保持している。前者は非圧縮のmovファイル、後者は圧縮されたH.264（mp4）ファイルであり、サイズはかなり異なる。非常に長いカットなしのインタビュー映像などもあるため、保存用ファイルはテラバイトを超える非常に大きいサイズである。たとえば、2013年9月に行われたインタビューの保存用ファイルは、movファイルで長さ1時間45分、データサイズ974GB、ビデオビットレート1326Mbps、オーディオビットレート2304Kbps、オーディオサンプルレート48.0KHz、ビデオビット深度10、アスペクト比16：9というものであった。メディアから映像使用のリクエストがあった場合、保存用ファイルから放送に適した画質のコピーファイルを作成することになっている。ユーザーがテレビ局なのか、それとも研究者なのかによって、必要なデータサイズは異なるということであった。所長のAndy Leach氏は、関西大学で構築中のアーカイブにおいても、保存用の非圧縮ファイルと、アクセス用のファイルの2種類を持つべきだと意見を述べた。

フェア・ユース規定について

米国の著作権法第107条では、包括的な権利制限規定である「フェア・ユース」が定めら

れ、教育・研究・調査目的での著作物の使用は著作権侵害にはあたらないとされる。しかし、ポピュラー音楽は現代的なものであり、現在も利益を生み続けるものであるため、米国においてもフェア・ユースの扱いはかなり難しいものであるとのことであった。このアーカイブでも、映像資料の閲覧を行うには、利用者が直接アーカイブを訪ね、閲覧室で見なければならないという規則になっている。インターネット上に映像ファイルをアップロードし、家で見られるようにすることはできない。ミュージアムや財団のイベントで映像を一般公開する際も、パブリックパフォーマンスライセンス (public performance license) に対して、使用料を支払っているという。

カタログとファインディングエイド (Finding Aid)

図書館とアーカイブ所蔵の資料カタログは、インターネット上で閲覧できる⁵⁾。このカタログは、デジタル資料だけでなく、書籍、雑誌、CDなども含んだものである。アーカイブ資料については、ファインディングエイドも作成されている。

映像のカタログには、内容の概要説明が掲載されている。概要の作成には非常に時間がかかるが、大学院生やインターン、メタデータ担当司書、映像アーキビストなど、知識のある人が担当をしている。映像に写っている人物が誰か分からないような場合には、事情をよく知る人たちを集めて映像を見せ、内容を同定することもある。

このアーカイブでは、カタログやファインディングエイド作成に、デジタルアセットマネジャー “Hydra” を用いている。“Hydra” はオープンソースソフトウェアであり、テクニカルメタデータや記述メタデータ、資料の概要などを記入していくことができる。複数人での編集も可能である。アーカイブ側で見えている画面と、ユーザー側が見られる部分が別になるようにコントロールすることもできる⁶⁾。複数人で作業を行うために、ドキュメンテーションマニュアルが策定されている。タイトル、プログラムシリーズ、ファイルの出所、元テープや元資料がどこにあるか、資料に貼ってあるラベルに何が書いてあるかといった項目が設定され、記録をしておくことになっている。現在は “Hydra” を用いているが、いずれ “Archive Space”⁷⁾ などに移る可能性もあるということであった。

5) カタログは以下のウェブページから閲覧可能である。http://catalog.rockhall.com/ (最終閲覧日2015年6月30日)

6) ロックンロール・ホール・オブ・フェイムにおける “Hydra” の導入は以下に詳しい。http://projecthydra.org/community-2-2/partners-and-more/rock-and-roll-hall-of-fame-2/ (最終閲覧日2015年6月30日) また、以下で “Hydra” の使用デモ動画を閲覧できる。http://screencast.com/t/2H2DaVefjfr (最終閲覧日2015年6月30日)

7) http://www.archivesspace.org/ (最終閲覧日2015年6月30日)

メタデータについて

メタデータとは、資料に関するすべて（all about）を記述するものであり、その資料を誰がいつどこでどのような理由で閲覧できるようにするかを決めるものとなる情報である。そのうち、テクニカルメタデータは、ファイルネーム、データサイズ、カラー、解像度などであり、これは自動で取得することもできる。記述メタデータは、映像に誰が出ているか、何を演奏しているか、何についてのインタビューなのか、元テープのラベルには何と書いてあったか、といった情報である。記述メタデータは、映像資料を見ながら人が入力するため、作成に非常に時間がかかる。

メタデータスキーマの標準としては、物理的に形のある資料（たとえば実際のテープなど）については、Describing Archives Contents Standard (DACS)⁸⁾がある。DACSは、ファインディングエイドがどういった項目を持つべきかといったことについての標準ガイドラインである。音源資料、映像資料向けのメタデータスタンダードにはPBCore⁹⁾がある。これはXMLスキーマであり、どのような種類のフォーマットでも取り扱い可能である。アーカイブでは、これらに基づいて自分たちの標準を模索しているとのことであった。というのも、このアーカイブでは、図書館資料、アーカイブ資料、デジタルファイル、博物館収蔵品の写真などを、同じデータベースで管理しているためである。このため、ここでは普通のアーカイブでの記述の仕方を模倣しつつ、DACSやPBCoreといったその他の標準を組み合わせている。これは米国でもあまり見られない手法で、ユーザーにとっては便宜性が高いが、管理するには困難もあるとのことであった。

人名を含むメタデータ記述については、議会図書館典拠ファイル（Library of Congress Authorities）¹⁰⁾、バーチャル国際典拠ファイル（Virtual International Authority File）¹¹⁾、MusicBrainz¹²⁾などを利用している。

まとめ

音源資料や映像資料のデジタルアーカイブについては、2014年時点においても試行錯誤しているというのが現状である。特に文書資料などとの統合カタログ、メタデータのつけ

8) DACS Second Editionは以下で閲覧できる。<http://files.archivists.org/pubs/DACS2E-2013.pdf>（最終閲覧日2015年6月30日）

9) <http://pbcore.org/>（最終閲覧日2015年6月30日）

10) <http://authorities.loc.gov/>（最終閲覧日2015年6月30日）

11) <http://viaf.org/>（最終閲覧日2015年6月30日）

12) <https://musicbrainz.org/>（最終閲覧日2015年6月30日）

方などについては様々な検討が行われている。メタデータ付与に際しては、知識と人手が必要であることが強調されていた。また、非圧縮ファイルでの映像資料保存に伴う保存容量の増大と、データ冗長性確保が課題とされていた。米国にはフェア・ユース規定があるとはいえ、現代のポピュラー音楽を展示するにあたっては、やはり使用料を支払う必要があり、インターネット上での閲覧も制限されることが明らかになった。

4. University of Minnesota, Twin Cities, Archives and Special Collection Units 調査記録

「ロックの殿堂」は財団を基盤としており、博物館の人気もあいまって経済的にはかなり安定した状態にある。一方で、日本国内では大学をはじめとした学術機関にアーカイブを作ろうとすることも多いため、学術機関付属のアーカイブの運営についても調べておく必要がある。

ミネソタ大学ツインシティー校では、図書館機構に大規模なアーカイブが併設されている。ミネアポリスキャンパスウェストバンク（ミネアポリスキャンパスはミシシッピ川を挟んで東西に分かれている）のアンダーセン図書館（Andersen Library）は主にアーカイブオフィスおよび閲覧室として用いられ、地下に巨大な収蔵庫を持つ。ここに入っている



図4 ミネソタ大学アンダーセン図書館外観

Archives and Special Collections Units (ASCユニット) は、建築、児童文学、移民史、計算機史など、テーマによって17のユニットに分かれている。

聞き取りは、ASCユニット内にあるチャールズ・バベッジ研究所 (Charles Babbage Institute, 計算機史を専門とする研究所) のアーキビスト、R. Arvid Nelsen 氏に対して2014年9月3日と4日に合計3時間程度行った。彼はASCユニットにおいて電子記録の責任者を務める人物で、アメリカ図書館協会 (The American Library Association) の一部門である大学・研究図書館協会 (The Association of College and Research Libraries) の、稀観書・手稿部門代表でもある。聞き取りを行った場所は、アンダーセン図書館内にあるR. Arvid Nelsen 氏のオフィスである。またチャールズ・バベッジ研究所長で技術史家のThomas J. Misa氏にも、9月3日に彼のオフィスでコメントを求めたので、最後に追記する。

アーカイブでの画像や書類のデジタル化

ミネソタ大学のアーカイブでは資料の複写に際し、近年は紙コピーが行われることはなく、スキャンしてpdfファイルにするという方法をとっているとのことである。一度pdf化したファイルはそのまま保存する。次に複写リクエストが来た際に使用することができ、度重なる複写によって資料を傷めずにすむためである。書類に関してはpdfファイルで十分であるという判断がなされている一方、画像については、ミネソタ大学のデジタル図書館サービス部門 (Digital library service department) が、高解像度のtiffファイル作成を行っている。tiffファイルは、特に印刷物に使う際に適している。低解像度のjpegファイルを作ることもあるが、こちらはオンラインでの閲覧用や参照用である。こういった低解像度のファイルは印刷に向かないため、オンラインでコピーしたりダウンロードしたりすることは妨げない。印刷物に使用したいときには、使用者は有料のtiffファイルを請求することになる。

デジタルデータのファイルは大学のセントラルサーバーに保存しており、バックアップにはテープメディアを用いている。

デジタル資料の公開と著作権

著作権、特にデジタル資料の著作権は米国でも難しい問題とされている。研究目的でアーカイブを訪問して資料の記録を取ることは通常許されているが、資料をデジタル化してオンラインで公開すると著作権上の問題が生じる。米国では、音楽でも映像でも、「個人使

用 (private use)」と「一般公開 (public presentation)」とで扱いが異なる。例えば、あるビデオテープを研究者が閲覧室で視聴する場合、それは個人使用とみなされるが、誰でも見られる場所に展示してたくさんの人々を招くと「上演 (performance)」とみなされる。この場合、使用料を支払わないと法律違反になる。また、著作権の問題は資料の寄付者の方針にも依存する。ただし、もし資料の寄付者が「保存はしたいけれど利用可能にはしたくない」と言うのであれば、寄付者には「これにはその価値があるのか？」と問わねばならない。というのも、アーカイブのミッションは、モノを利用可能にすることであり、誰かの「銀行 (bank)」になることではないためである。アーカイブは貸金庫 (safety deposit box) ではない、と Nelsen 氏は強調していた。

著作権だけでなく、個人情報の問題もある。アーカイブ資料には、個人情報や機密情報、財務情報が含まれている場合があるため、資料を閲覧したい人にはアーカイブを直接訪問してもらう必要がある。それは、アーカイブ内の資料が、基本的には不特定多数の人間のためのものではないからである。想定されているのは、時間やお金を割いてここまで来るような「真剣な研究者 (serious researchers)」である。アーカイブではIDで閲覧者個人を同定して登録する。また閲覧者は資料の入っている箱の中身全てを見ることになり、それは資料の文脈全体を理解することに繋がる。もしもこれをオンラインで閲覧できるようにすると、何万人もの人々が資料を閲覧することになって、閲覧者が誰もまったく把握できなくなる。また閲覧者自身も文脈を理解することなしに、ひとつひとつの文書を独立に (in isolation) 見ることになってしまう。

デジタル資料の最も制限された閲覧方法は、閲覧室にインターネットに繋がらない閲覧専用のコンピュータを置いて、USBメモリも差せないように設定し、あたかも箱の中の紙資料を見るかのように資料を閲覧してもらうという方法である。しかし、この方法では「多くの人に見てもらえる (reaching broader audience)」というデジタルの利点を生かせないため、アーカイブではその中間を模索している。たとえばオンライン閲覧室という可能性がある。閲覧者の登録を必須とし、閲覧時間も制限し、場合によっては映像資料のダウンロードを防ぐためにストリーミングビデオにするといった方法である。カメラを設置して画面を撮るといった迂回方法は考えられるものの、不正コピーを制限することは可能である。

アーカイブの予算運営について

米国の学術機関アーカイブでも、厳しい予算運営を迫られている。そもそも大学全体の

予算において、州からの補助金は減らされ続けている。ミネソタ州からは予算全体の15%分しか来ていない。ミネソタ大学全体としては、州からの補助金のほかに、連邦からの補助金、寄付金、ビジネス、ファンドレイジング、卒業生、そして授業料から収入を得ている。なかでもビジネススクールや工学部などは、補助金やビジネス契約、企業からの寄付などから直接に資金を得ている。図書館は直接収入を得られないが、大学内で一定の役割を果たしているため、各学部から「税 (tax)」を徴収する形で、予算の枠がある。

図書館には、大学からとは別に、州から図書購入のための補助金が出ている。そのうちアーカイブに配分される補助金は少なく、たったの0.5%である。ASCユニットにおける予算は州からの補助金では賄えないため、各ユニットは直接の（資料の）寄付に頼っている。なお、図書館機構から配分される予算の用途は図書の購入に限られ、郵便の発送にも、オフィス文具購入にも、人件費にも使用できない。しかも、この制度が2007年に始まったとき、図書館からチャールズ・バベッジ研究所に割り振られた資金は年額300ドルであった。2014年は何とか年額2,500ドルを獲得し、改善されたが多くはない。アーカイブのスタッフの人事権は図書館機構にあるが、過去数年で人件費予算が削られたため、アーキビストのポストが減少した。以前は学生のアシスタントも3人いたが、いまチャールズ・バベッジ研究所のアーキビストは一人しかおらず、あらゆる業務を一人で担当している。

現在、外部から直接の寄付を得ようと考えている。ASCユニット内でも、アーキビストの給与の半分が外部資金で賄われている例があるためである。資料の寄付にせよ、資金の寄付にせよ、外部リソースをより活用する必要がある。チャールズ・バベッジ研究所で扱っているのは「計算」の歴史であるが、現在ICT産業で働いている人たちを巻き込み、ビジネススクールや工学部のように、企業から直接資金を得ることを考えている。アーカイブにとって、資金問題は全国的な課題であり、2014年の米国アーキビスト協会（Society of American Archivists）の大会では、クラウドファンディングに関する発表も行われたとのことである¹³⁾。

アーカイブのミッション

R. Arvid Nelsen 氏が言うには、計算機史のアーカイブとポピュラー音楽のアーカイブに共通の課題は、「現代の歴史は古い歴史と同じくらい価値がある」ということを人々にど

13) 2014年8月に行われた学会の概要については以下を参照のこと。<http://www2.archivists.org/2014>（最終閲覧日2015年6月30日）

うやって理解させるかにある、とのことである。すなわち、200年経ってしまったときには保存できないようなものを保存する機会が、今あるのだということを、どのように理解させるかということである。人々は古いものを「歴史的」だと思わずに「時代遅れ」だと感じがちだという。アーキビストの仕事とは、できるだけ様々な情報を公開することであり、これは歴史の物語を語ることではない。歴史を保存することと、歴史を語ることは異なる。アーカイブのミッションとは、あくまで歴史を保存することである。一方で、資料の寄付者は事前に何を寄付するか、何を寄付しないかを定めることができる。そのため、寄付者は常にある一定の範囲で資料の伝える「メッセージ」をコントロールできるということも覚えておくべき、とのことであった。

Thomas J. Misa氏によるコメント

Thomas J. Misa氏によれば、資料をデジタル化するとき、デジタルファイルの解像度と容量については注意すべきとのことであった。15年くらい前にデジタル化した画像ファイルは解像度が240dpiで、資料によっては文字がつぶれており、今となっては使い物にならないものがあるとのことである。機器はすぐに進化するため、非常に大きなファイルであっても保存することには意味がある。ただし、用途によっては、ある水準を満たせばそれで十分ということはある。ただし、デジタル化した後にも、オリジナルの資料本体は残しておくべきだという。デジタル化は往々にして失敗していることがあり、それに後で気付くことがあるためである。

アーカイブ構築を自動化することはなかなかできない。アーカイブを作るには、人間の労働力が多く必要だが、それが理解されていないことは米国でも非常に多い。いずれにせよ、とにかく資金が重要とのことであった。米国にはアーカイブが根付いてはいるが、それでも資金不足で閉鎖されるアーカイブは多いという。

まとめ

デジタル資料の閲覧と公開にまつわる著作権問題については、ロックンロール・ホール・オブ・フェイムとミネソタ大学とで、同様の問題意識に基づくコメントが得られた。また、アーカイブ構築に人手が必要なこと、資料のデジタル化を大きいファイルサイズで行っておくことの重要性についても同様であった。資金調達についてはロックンロール・ホール・オブ・フェイムの図書館とアーカイブに比べて厳しい状況にあり、試行錯誤がなされていることがわかった。また、アーカイブ構築と歴史記述とを、意識的に区別する重要性につ

いて指摘がなされた。今後、関西大学でアーカイブを構築するにあたり、同様の課題に直面することが考えられ、こういった海外の事例を参考に対策を練る必要があると考えられる。

—2015.7.12受稿—